

食べそこねた鯰の蒲焼

染谷 秀雄

かねてより蟹江にある青邨先生の句碑を訪ねてみたいと思っていた。丁度、名古屋へ所用があったため、翌日近鉄とタクシーを乗り継いで句碑のある鹿嶋神社へ出かけた。

青邨先生は生前黒川巳喜氏からの依頼で句碑の作品を作るべく昭和五十七年に斎藤夏風先生を伴って蟹江で俳句を作り、翌年の五月に句碑除幕式を行っている。当時の「夏草」を読み返してみると辺りは水郷の様相を呈していたようだが現在では神社の周りには田圃が広がり、家が建ち、随分と違っているように思えた。

蟹江に行った折、地元の夏草同人達と鯰の蒲焼を食したことが、夏風先生の自註作品で窺うことが出来、自分も同じ蟹江で昼食に鯰の蒲焼を食べようと駅周辺を随分と探したがそれらしき店はなかった。外に出ていた商店主に訊ねてみたが鰻ならともかく鯰のことは余り知らないようである。ネットで調べた店に電話をしてみると鯰の蒲焼をやっているか今日は大きいのならあるが小さいのは予約してないと入らないとのこと。五六人前では仲間が居ればともかく一人では食べきれない。何はともあれ話のネタにと思ったが食べることは断念した。夏風先生の自註によれば鯰の蒲焼を見たとき、「身構えたが軽く美味い」とあった。食べ物に割と好き嫌いのある夏風先生が鯰の蒲焼を得意気に話す姿を思い出し、無性に懐かしく思われた。

写真で見る鯰の蒲焼は肉も厚みがあり鰻重や穴子飯に比べると見た目の姿がきれいに揃っていない。結局は鯰を食することも見ることも叶わなかったが半面ホツとしたのも正直な気持である。代りに食べてきたのは「ひつまぶし」であった。